

# 15のいす

—みすゞの心—

最高裁判所判事

櫻井龍子



金子みすゞの詩を初めて目にしたのは、もう10年ほど前のことになる。浜は鯛の大漁で祭りのようだけど、海の中は何万の鯛のとむらいだという短い詩が妙に印象に残った。調べてみると、今の山口県長門市や下関市に住み、大正から昭和にかけて活躍した女性の童謡詩だという。

鯛の大漁を海の中のとむらいだととらえる感性は、つつい人間中心の見方に陥りがちな私達には衝撃である。同時に、物事には必ず二面性があることも示唆している。裁判官が常に悩まされる事態である。ひとつの事実が見方によって全く異なる結論につながる。どちらも正しいとしても裁判官はどちらかの結論を選ばざるを得ない。イデオロギーや人生観あるいはリスク思想などの違いだと割り切って選択するのはたやすい。しかし、それでは世の中の進歩にはつながらず、対立は残ったままとなる。それらの違いを超えた、より高次の理念が求められる。鯛の大漁の場合は、はるかなる宇宙や地球の成り立ちにまで遡って考えることになろう。



よく知られているみすゞの詩に、昼の星は眼に見えぬ、見えぬけれどもあるんだよというのがある。私たちが見ているのは人や物のごく一部で、本当は見えないところがたくさんあるということ。裁判では、なるべく

見えない部分、裏に隠れている事情なども洞察しながら判断するようにしているが、最高裁が法律審であることの限界なのか、三次元の世界を二次元にして見ているようなもどかしさを感じる時がある。大型望遠鏡を通すと見えない星もギラギラ輝いて見えるそうだから、一度大型望遠鏡を裁判に使ってみたいものである。

みすゞの詩で最も惹かれるのは、子どもが小雀を捕まえて子どもの母さんは笑って見ているが、小雀の母さんは屋根の上で心配そうに見ているという詩である。離婚後別れた夫が子どもを引き取りに来る前夜に、抗議のため26歳の若さで自死したみすゞである。彼女の願い通り祖母や叔父に引き取られ育ったその娘さんが、80歳を超えた今、若い頃は悪い母親だと思っていたと述懐するのを聞き、家事事件のわりなさを痛感するのである。

(さくらい・りゅうこ)